



Title	初代伊東陶山の生涯と業績 : 京都陶磁器業への貢献と帝室技芸員任命について
Author(s)	北山, 明乃
Citation	デザイン理論. 2021, 77, p. 53-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初代伊東陶山の生涯と業績

京都陶磁器業への貢献と帝室技芸員任命について

北山明乃

キーワード

初代伊東陶山, 近代陶磁器, 粟田焼, 京焼, 帝室技芸員
Ito Tozan I, Kyoto ceramic industry, Awata ware, Kyoto ware,
Imperial Household Artist

はじめに

1. 初代伊東陶山に関する先行研究
2. 初代伊東陶山に関する資料について
3. 初代伊東陶山の生涯と業績
 - 3-1. 開業まで
 - 3-2. 粟田焼の復興
 - 3-3. 陶磁器産業への貢献と緑綬褒章
 - 3-4. 意匠改革 — 遊陶園
 - 3-5. 帝室技芸員任命とその後

おわりに

はじめに

初代伊東陶山（1846-1920）は、明治後期から大正期にかけて活動した京焼の陶工である。新しい釉薬の開発や、陶磁器組合の統一を主導するなど明治後期以降の京焼の振興に功績を残した。そして、陶業界に果たした実績が認められて1899（明治32）年には緑綬褒章を受賞し、1917（大正6）年には帝室技芸員に任命されている。約58年間に帝室技芸員に任命された陶工や陶芸家は5名のみであり、近代日本を代表する陶芸家の一人であるといえよう。



明治期における日本陶磁の研究はイギリスの実業家ナセル・D・ハリリ（Nasser D. Khalili, 1945-）のコレクション¹に代表されるように、明治期に輸出された作品の海外での収集から徐々に盛り上がりを見せていった。やがて熱心な日本人コレクターの登場などに合わせて、日本の陶磁器産地での明治研究が本格的に始まる。しかしながら、初代伊東陶山は帝室技芸員に任命された他の4名（三代清風與平、初代宮川香山、初代

本稿は、第241回意匠学会例会（2020年5月9日、武庫川女子大学）での発表にもとづく。

諏訪蘇山、板谷波山)に比べると、現存が知られる資料は限られており、展覧会等で作品を目にする機会は少ない。そこで、本論では、初代伊東陶山に関する資料を研究対象としてこの陶工の業績を明らかにすることを目的としている。

以下、特に断りのない限りでは初代伊東陶山のことは陶山とのみ称し、二代・三代伊東陶山についてはそれぞれ二代陶山・三代陶山と述べることとする。また、引用文中の旧漢字は新漢字に改めた。

1. 初代伊東陶山に関する先行研究

冒頭で述べたように、初代伊東陶山に関する先行研究は限られている。1979(昭和54)年に京都府立総合資料館(現在の京都学・歴彩館)で開催された「明治の京焼」展においては三代清風興平(1851-1914)と共に新時代の陶芸界を支えた人物として紹介された。しかしその後、陶山に注目した研究が進むことはなかった。

一方、1970年代頃から、明治期に国内外へ輸出された工芸を集めたコレクションの形成が始まっていた。前述のハリリ・コレクションや、大英博物館やヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、スコットランド国立博物館などに数百点の近代陶磁器を寄贈したデイヴィッド・ハイアット・キング(David Hyatt King, 1946-2016)のコレクションはこの時期に収集が始まっている。国内では田辺哲人氏による初代宮川香山(1842-1916)の作品を中心とするコレクションも同時期に始まっており、清水三年坂美術館の村田コレクションは少し遅れて1980年代である。陶磁器に関して述べれば、細密な絵付けを施した薩摩金襴手や帝室技芸員であった初代宮川香山の作品がまず注目を集めていた。いずれも、かつて大量に欧米に輸出され、当時は比較的安価であったことなどがまとまったコレクションが形成された要因であろう。

日本において明治以降の美術・工芸が注目されるようになるには1990年代まで待たなければならなかった。注目すべき展覧会として、1996(平成8)年にサントリー美術館で開催された「近代美術の巨人たち：帝室技芸員の世界」がある。当時は忘れ去られていた帝室技芸員制度に注目が集まるようになり、帝室技芸員に陶芸家として任命された5名に関する研究が進められるきっかけとなった。1999(平成11)年、近代国際陶磁研究会が発足したが、『近代国際陶磁研究会通信』1号に掲載された発足の趣旨には、それまでの日本の陶磁研究は前近代が中心であったこと、そのため、海外からの里帰り品が増えたにも関わらず近代陶磁の研究は進んでいないことが指摘されている²。同様の動きは全国の陶磁器産地に及び、2000年代には近代陶磁の研究が全国的に進んだ。そして、2010(平成22)年、愛知県立陶磁資料館(現在の愛知県立陶磁美術館)で「明治の人間国宝——帝室技芸員の技と美：清風興平・

宮川香山から板谷波山まで——」が開催された。この展覧会で16点の陶山の作品が出品された。多いとは言えない点数ではあるが、本展は公立美術館主催の戦後最大級の陶山作品の展示だったと推測される。

このような流れの中で、陶山以外の4名の帝室技芸員への注目度は高まり続けてきた。初代宮川香山については1980年代以降、横浜美術館を中心に多くの展覧会が開催されている。2010(平成22)年には、横浜に山本博士氏のコレクションを展示する宮川香山真葛ミュージアムがオープンした。2016(平成28)年にはサントリー美術館等において「没後100年宮川香山」展が開催されたが、先述の田辺氏のコレクションを中心にした初代宮川香山作品を網羅する一大展覧会であった³。三代清風與平については岡本隆志氏や前崎信也氏の諸論考、そして2014(平成26)年には出身地である兵庫県姫路市の書写の里美術工芸館で「大塩が生んだ京焼の名工三代清風與平」展覧会が開催された⁴。初代諏訪蘇山(1851-1922)の研究は香山や清風に比べると進んでいるとは言えないが、2014(平成26)年に蘇山の出身地である石川県の九谷焼美術館において開催された「九谷の陶彫」展で、近代九谷の陶彫を代表する作家として多くの作品が展示された⁵。最後に板谷波山(1872-1963)は、帝室技芸員よりも文化勲章受章者という肩書で知られており、他の帝室技芸員とは異なる紹介の仕方をされてきた。1980(昭和55)年に茨城県筑西市の生家の跡地に板谷波山記念館が開館。出光美術館が多くの作品を所蔵していたため、すでに1980年代から何度か大きな展覧会が開催されている⁶。

こうしてみると、作家の優劣に関わらず、出身地と活躍した場所がどこであったかということが、後世における研究の多寡を左右することがわかる。初代宮川香山は京都出身だが、工房を構えた横浜で活躍した。横浜は歴史が浅いため、日本だけではなく世界でも活躍した地域の偉人として香山を発信し続けてきた。三代清風與平は兵庫県出身、初代諏訪蘇山は石川県出身でいずれも京都で活躍をした。しかし、二人の展覧会が行われたのは京都ではなくそれぞれの出身地でのことである。

これは平安遷都以来の文化資源の集積地である京都の近代美術研究が抱える問題であるともいえるだろう。京焼の最高峰とされる陶工は江戸時代の野々村仁清や尾形乾山とされている中で、近代の陶芸家を紹介する機会は少ないのが現状である。さらに、国指定の伝統的工芸品が京焼・清水焼を含めて17種類ある。他の陶磁器産地のように、その土地で育まれてきた工芸品が陶磁器しかなければ、それに関わった過去の偉人を顕彰する機会は少なくないが、京都の美術館・博物館では京焼・清水焼にだけ焦点を当てるわけにもいかない。

とはいえ、これまでに陶山の研究が全く存在しなかったわけではない。歴代陶山の作品を識別する事が大変難しい状況を踏まえ、関和男氏と吉田和夫氏によって作品の落款調査がな

されている。その結果、作品の押印だけで各代を判別することは難しいが、箱書には歴代で差が見られ、「陶」の字の「こごとへん」に特徴がある事が明らかにされた⁷。

他の研究は陶山作品や業績に関してというよりも、彼が収集・寄贈した作品についてのものといえる。森下愛子氏の研究では技や意匠の継承を製陶家が参考にした古陶磁から解き明かすべく、陶山が京都帝室博物館へ寄贈した古陶磁群や、京都市立陶磁器試験所旧蔵の参考品の紹介をしている⁸。尾野善裕氏は陶山が寄贈の仲介をしたエミール・ミュラー社製の壺とその際の文書を紹介し、京都・奈良帝室博物館に寄贈された陶山の収集品について明らかにした⁹。

2. 初代伊東陶山に関する資料について

以上を踏まえると、陶山の研究はまだその端緒にも至っていないことが明らかである。そこで本論文では研究対象となる陶山に関する基礎資料を提示することから始めたい。初代伊東陶山を研究する上でまず注目すべき資料は、『初代陶山小伝』（二代伊東陶山編、1932年）である。本書は全34頁の和綴の小冊子で、陶山が没してから12年を経て刊行されたものである。関如来（巖二郎）による稿の「初代伊東陶山小伝」では陶山の事績が説明されており、その他にも代表作品の作品図版が掲載されているなど、陶山研究にとっては極めて重要な内容を多く含む。住友務氏から寄贈されたものが国会図書館に所蔵されており同館のデジタルライブラリーで一般公開されている。二代陶山による「故伊東陶山小伝」（帝国工芸会『帝国工芸』3巻11号、1929年、39-41頁）は、『初代陶山小伝』に先立って著されたものであり、重複する内容も多い。陶山が考案した釉薬が年代と併せて記されており、作品の上限を推定する際に有用な情報がまとめられている。

陶山の生前にまとめられた資料としては、京都学・歴彩館に所蔵されている「出品解説書」（『陶磁器業者二関スル取調書』編纂年不詳）がある。これは明治前半に国外開催の博覧会へ出品する際に編集されたものと思われる。巻頭には「明治十八年二月廿四日」と記されているが、本文中に記載されている博覧会等への出品履歴は1892（明治25）年分まで記載されている。同じ冊子には他の粟田焼の解説も記載されており、錦光山宗兵衛、帯山与兵衛、安田源七は、陶山と共に1888年のバルセロナ万国博覧会で受賞した粟田焼の陶工たちである¹⁰。1867（慶應3）年に祇園で開業してから工場を構えていた最初期の活動形態が分かる資料である。

黒田天外（讓）『名家歴訪録上篇』（1899年）は、著者の黒田が1898（明治31）年3月16日に陶山の自宅を訪ね、その時に取材した内容をまとめたものである。同書にて黒田の取材を受けた京焼の陶工には三代清風與平、七代錦光山宗兵衛らがいる。自身の経歴の他に自ら

が陶工として活躍していた粟田焼についての伝承を語っている。

「陶山及清風両君の陶磁器談」(『大日本窯業協会雑誌』7集83号, 1899年7月)では、京都日出新聞紙上に掲載された陶山と三代清風与平の談話が再掲されている。陶山は清水や粟田地域の陶磁器業の現状や、輸出品における外国人の趣味について語っている。さらに、陶山を知る同時代の人物による記述として、陶工である真清水蔵六が著書『古今京窯泥中閑話』(永沢金港堂, 1935年)に「伊東陶山」と題し記述している。

この他に、陶山の履歴を掲載した雑誌の記事が3件ある。金子静枝「伊東陶山君の名誉」(『京都美術協会雑誌』67号, 1898年1月)は、陶山の緑綬褒章受章を記念して執筆された。12ページに亘って紙面が割かれているが、その内の4ページほどは1880(明治13)年から1899(明治32)年までの博覧会等の受賞歴に当てられており有用な資料である。広田三郎『実業人傑伝』5巻(実業人傑伝編集所, 1898年)は美術工芸の関連書籍ではなく、事業に成功した人物を列挙しまとめた本である。ビジネス書とも言うべきもので、陶山の開業から粟田焼の改良に重きを置いた内容である。また陶山が関与した各組織の役員就任歴もまとめられている。野村成之「京都美術沿革史 伊東陶山」(『京都美術協会雑誌』124号, 1902年10月)¹¹は京都美術の発展に貢献した美術工芸家を紹介する連載であり、経歴が簡潔にまとめられている。

陶山に関する記述以外で重要と考えられる資料は2点ある。まずは、1910(明治43)年の日英博覧会で銀牌を受賞した際の賞状である¹²。さらに、初代陶山の他に真清水蔵六、初代三浦竹泉、初代諏訪蘇山の印譜(1917-1920年)がある。表紙の見返しに押してある「小幡」という印や但し書き、内容から、初代諏訪蘇山を始め京焼について論考のある小幡茂氏が旧蔵していた可能性が考えられる。陶山所有の印の中に「帝室技芸員」と彫られた印が含まれていることから1917(大正6)年から1920(大正9)年までの3年間に押されたと確定できる¹³。上記以外にも、略歴、博覧会への出品や入賞について、褒章受章や帝室技芸員任命についてなど陶山に関する簡潔な記述は散見されるが、陶山の事績について特筆すべき内容が記載されているものは、管見によれば以上である。

3. 初代伊東陶山の生涯と業績

3-1. 開業まで

ここからは、上記の資料記載の内容を精査し、陶山の生涯と業績の概要を提示することとする。陶山は1846(弘化3)年、山城国愛宕郡粟田領(現在の京都市東山区)に伊東善輔の長男として生まれた。幼名を重次郎と言い、後に幸右衛門と改めている。1895(明治28)年には号である陶山を本名とした。幼い頃から体が弱く、1857(安政4)年に円山派の画家で

ある小泉東岳に弟子入りした。当時は画業一本で生計を立てるには厳しい時代であったようで、東岳のもとでは茶碗の絵付けや、東岳の妻の仙女と共に手びねりによる土瓶の制作を手伝っていた。これが陶山と陶業との出会いともなった。1863（文久3）年には東岳の勧めによって陶業の道を志すこととなる¹⁴。

陶山の業績の中で同時代の陶工と異なることは、多くの師を持ち様々な技術に触れていることである。和漢の陶法に精通していたという五条坂の陶工・亀屋旭亭に師事し、その他にも五条坂の調和軒与三兵衛、村田亀水、幹山伝七、粟田では帯山与兵衛、一文字屋忠兵衛・嘉兵衛、岩倉山喜平らに学んだ。幕末期の五条坂と粟田はライバル関係にあったとされている¹⁵。さらに全国的に有名な窯業地である、信楽、丹波、伊予、美濃、瀬戸などを巡り、それぞれに1ヶ月から半年ほど滞在しては研鑽を積んだという¹⁶。幕末期といえば、どの陶磁器産地においても他地域への技術の流出に非常に敏感だった時代だ。それにもかかわらず、各地でさまざまな技術や知識を学べた理由は何だったのかは今後検討すべきである。そして、1867（慶應3）年には祇園に自らの店を構えた¹⁷。号に陶山を初めて用いたのもこの頃である。

3-2. 粟田焼の復興

明治の他の多くの工芸家と同じように、陶山の転機となったのも内国勧業博覧会であった。内国勧業博覧会は殖産興業を目的として、万国博覧会を手本に海外の新技术や国内の農産物、美術工芸品を紹介した国家的事業で、1877（明治10）年から1903（明治36）年までの間に5回開催された。陶山は第4回時に出品して銀牌を受賞している。

陶山にとって転機となったのは1881（明治14）年に東京・上野で開かれた第2回内国勧業博覧会であった。見学に訪れた会場で居合わせた「現在はよい所へお出なさる」人物から変わりつつある粟田焼の古き良き姿を保存することを勧められた¹⁸。以後、陶器と磁器の兼業から陶器に重きを置いた制作に移った。その当手を振り返って陶山はこのように語っている。

当時粟田焼といへば、あの金燦爛の貿易品ばかりで、其声価も低下り、粟田焼といへば、一概に金燦爛かといふようになってゐるは実に残念ではないかとのお談話で（中略）粟田焼の古い処を保存し、改良することに決心いたしまして、夫からは陶器ばつかりに致しました¹⁹。

ここで陶山が述べていることを簡単に説明したい。

彼が工房を構えていた粟田は江戸時代から続く京焼の一大産地であった。東海道の京都への入り口である三条大橋からすこし山手に上がった周辺一帯にかつては多くの登り窯から黒

煙が上がっていたとされる。この地域の製品の特長は釉薬に貫入と呼ばれる細かなヒビの入った乳白色の陶器である。

有力な門跡寺院である青蓮院のお膝元であるこの一帯は皇室とのつながりも深かったが、大政奉還と東京奠都により武家や公家といった有力な顧客の多くが東京に移住してしまった。一方、明治初期から関西では神戸港からの外国向け輸出が可能となり、ウィーン万博やフィラデルフィア万博で好評を博した京薩摩と呼ばれる製品の生産に着手した。京薩摩の薩摩とは、薩摩焼のことを指している。万博で展示された日本製陶磁器でいち早く注目されたのが、金をふんだんに用いて、細密な日本的なデザインを施した薩摩焼であった。そこに目を付けた粟田焼の陶業者は薩摩焼を模した京薩摩の大量生産を始めたのである。

しかし、粟田焼は1882（明治15）年から始まった不況の結果、深刻な販売不振に陥る。不況の只中である1883-84（明治16-17）年の生産額は、直前の数年間の半分ほどであったという²⁰。この不況について七代錦光山宗兵衛（1868-1927）は以下のように語っている。

そうして明治六年頃から、追々発達して参り、十年から十二三年頃まで、最も盛んで亙りましたが。十四年から十五、十六と三年程続きまして、世間一般の不景気で、粟田の陶業も殆んど廃絶に帰せん光景で、同業者中にも多く休業致し、亡父も余程苦心致しましたが²¹。

「世間一般の不景気」というのは、1881（明治14）年に大蔵卿（1885年からは大蔵大臣）に就任した松方正義によるデフレ政策の影響であった²²。その後、しばらくして徐々に売り上げが回復し、1888-89（明治21-22）年頃に絶頂期を迎えた粟田焼だが、この頃から、粗悪品が横行するようになる。更に、海外輸出が広がるにつれて、特徴である釉薬の貫入は欠陥

（表1）初代伊東陶山の発明した釉薬等一覧

西暦	和暦	発明品	西暦	和暦	発明品	西暦	和暦	発明品
1886	明治19	黒色	1899	明治32	黄色	1917	大正6	縹玉瓷
1890	明治23	白盛色	1899	明治32	淡水色	1917	大正6	露均釉
1891	明治24	青黒色	1914	大正3	慶雲髹	1917	大正6	烏緑釉
1891	明治24	盛青色	1915	大正4	哥緑瓷	1918	大正7	黄沙瓷
1891	明治24	茶褐色	1915	大正4	粉青釉	1918	大正7	玳瑁釉
1891	明治24	藍色	1915	大正4	兔毫玳瑁	1918	大正7	白檀髹
1893	明治26	盛緑色	1916	大正5	紅班釉	1918	大正7	茄玻紫色
1894	明治27	紺青色	1916	大正5	翠碧釉	1919	大正8	擒果釉
1896	明治29	紫堇色	1916	大正5	秘色釉	1919	大正8	霽紅釉
1897	明治30	淡緑色	1916	大正5	祭紅釉	1919	大正8	黄玲瓷
1898	明治31	淡雲色	1916	大正5	片華錦	1920	大正9	葱翠釉
1898	明治31	浅絳色	1916	大正5	紫緑釉	1920	大正9	滴珠釉

※二代伊東陶山「故伊東陶山小伝」（帝国工芸会『帝国工芸』3巻11号）1929年、39-41頁を基に筆者作成

と見做されて敬遠されるようになった²³。デザインの面においても、外国人の好む細密で豪華な装飾を施した製品を盲目的に生産する体制に疑問を持っていたのだろう。

先述の陶山の言葉には、これらの問題を改善しようと考えていたことが見てとれる。当時の粟田焼の状況を踏まえて陶山は、粟田焼復活のために、近辺の山川から収集した土石、鉱物などの材料を研究し従来の粟田焼にはなかった多くの技術の開発を進めた。1877（明治10）年には既に「墨絵濃淡染付法」を発明していたが、その後もこの道を邁進し1888（明治19）年から1920（大正9）年にかけての発明品は36種に上る。後述する京都市立陶磁器試験場創設に奔走したことや、遊陶園への参加についても、粗製乱造に陥っていた粟田焼を改善するという目的を念頭に置いてのものであったのだろう。

3-3. 陶磁器産業への貢献と緑綬褒章

1885（明治17）年、陶山は39歳の時に粟田陶磁器組合長に就任した。地域の陶業者を代表する立場として、以後様々な活動に着手していく。陶山が果たした京都陶磁器産業への功績を述べる前に、1880年代の京都の陶磁器業界をおさらいしておきたい。維新後の京焼を牽引する役割を担ってきた名工・六代錦光山宗兵衛（1823-1884）、丹山青海（1813-1887）、三代高橋道八（1811-1879）、幹山伝七（1821-1890）らがこの時期に相次いで死去した。更に八代帯山与兵衛（?-1878）も時を同じくして隠居するなど、明治時代を支えた陶工が一線を退き、京焼は転機を迎えようとしていた。先述の松方デフレもこの時期に起こっており、まさに京焼苦難の時代であったといえるだろう。さらに、1895（明治28）年に誘致活動が実を結び京都で開催された第4回内国勧業博覧会の場で京焼の評価は振るわず厳しい批判を浴びた²⁴。この一件を契機に京焼の基礎改革が進められ、陶山もそれらに貢献したのだった。

まず、取り組まれたのは粟田焼・清水焼合同の商工組合の設立である。京焼の同業者組合には粟田陶磁組合と清水焼組合とがあったが、1894（明治27）年に両組合を合併し、京都市陶磁器商工組合が設立された。陶山は1896（明治29）年に同組合の頭取に推薦され、詳細は不明ながら、両者の融和を図り旧弊を打破するために奔走したと見られる。1898（明治31）年に頭取を退いた際は在任中の功績を称えて銀牌と彰功状が贈られている²⁵。

次に京都市立陶磁器試験場と附属伝習所の設立である。京焼の堅実な発展を促すため陶磁器の製法を科学的に研究する施設、ひいては子弟を教育する施設の設立が求められた。1896（明治29）年に陶山が頭取をする陶磁器商工組合が主体となり陶磁器事業者や学者など陶山を含む38名が京都市に働きかけた。京都市陶磁器試験所は五条坂にて同年、附属伝習所は1900（明治33）年に設立するに至った。陶山自身も独自で粟田焼改良を進めた経験を通じて、研究施設の有用性と人材育成の必要性を感じていたことだろう。設立後の京都市陶磁器試験

所で陶山は商議員として同所の活動を支えた。

陶芸家として多くの技術を開発し博覧会などで受賞を重ねたこと、そして組合や試験場創設に尽力したことを評価され、陶山は1899（明治32）年に緑綬褒章を受章している。緑綬褒章は地域社会の発展に貢献した人物に贈られるものである。以下が、陶山の受章理由全文である。

京都府京都市下京区祇園町

伊東陶山

夙に志を製陶に励まし各地の名工を歴訪してその蘊奥を究め或は古に徴して意匠配色を精くし良品を製して陶山焼の名を博し爾来洋食、器装飾器等を作り墨絵濃淡焼付法を創めて時好に適せしめ殊に粟田窯の粗濫に流るゝを憂へ多年刻苦所在の古石鉞属を探りて各種の釉薬を發明し固有の形式模様の新機軸を出し大いに内外人の精賞を得、販路を増進し声価を挽回するに至る。其他陶磁器組合の統一、試験所の設置等子弟の教養に尽力するなど洵に実業に精励し衆民の模範たるものとす明治十四年十二月十七日勅定の緑綬褒章を賜い其善行を表彰す²⁶

これまで述べてきた内容の繰り返しにはなるが、粟田焼に新しいデザインや技術を導入して新機軸を生み出したこと、国内外で販路を拡大したこと、地域の発展のために貢献したことが受賞の理由として挙げられている。

3-4. 意匠改革 — 遊陶園

先に挙げた褒章受章理由の文中に登場する「墨絵濃淡焼付法」は1877（明治10）年に陶山が開発した釉薬である。1919（大正8）年に京都帝室博物館（現在の京都国立博物館）へ寄贈された《染付山水図四方花瓶》に用いられた釉薬であり、乳白色のボディに豪華な装飾を施すのが特徴の粟田焼にありながら、より純白に近いボディに黒色が強い染付の濃淡で雪舟を想わせる山水図を描いている（図2）。このように陶器に歴史的な日本絵画を表現することが陶山作品の特徴のひとつとなっていた。

この意匠改革は、明治前期からの粗製乱造という問題の他に粟田焼が抱えていた問題であった。工芸界における新たなデザインの開発という問題はどの時代でも存在するが、特に海外輸出に進出を始めた明治初期以降、旧態



図2 《染付山水図四方花瓶》
京都国立博物館蔵

依然とした工芸デザインの改革は様々な形で試みられた。日本で最初に設立された公立の絵画学校である京都府画学校（京都市立芸術大学の前身）では、卒業生の多くが画家ではなく、京都にある多様な工芸産業の画工として活躍していた。常に新しいデザイン導入の必要性は唱えられていたのだが、明治時代前半を通して、欧米で人気となったジャポニスムにおいて、どちらかといえば日本的な装飾が海外で好まれるとされていたため積極的な意匠改革に着手できないもどかしさもあったことだろう。

この風潮を大きく変えることになったのが1900（明治33）年のパリ万国博覧会であった。ジャポニスムに代わる新たな様式としてアール・ヌーボーが提案され、日本の工芸品が得意とした精緻さと技巧を凝らしたデザインは旧時代的であると批判されたのである²⁷。このパリ万博に陶山が出品したと思われる作品のデザインが現存している（図3）。蓋つきの壺の前面に大胆に菊花をあしらったものであり、当時の日本の陶磁器としては先進的な意匠といえる。しかし、その形状や中国式の木製の台に載せられていることなど、全体的に見れば古風な雰囲気を持っていることは否めない。



図3 パリ万国博（1900年）
陶山出品作の図案

このパリ万博を視察していた京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）の初代校長中沢岩太（1858-1943）は危機感を覚え、1903（明治36）年に陶磁器の意匠研究団体「遊陶園」を結成した²⁸。遊陶園の一番の特徴は図案家と陶芸家が協力して作品を作ったことであり、図案家考案の意匠を基に陶芸家が作品を制作している。研究会は京都市立陶磁器試験場で1・2ヶ月に1度開催された。図案家は新しい作品の図案を、陶芸家は前回渡された図案から制作した作品や古今の参考品を持ち寄って批評し合い、今後の参考とした。図案家として活動に参加したのは浅井忠（1856-1907）、武田五一（1872-1938）、鶴巻鶴一（1873-1942）、萩原清彦（?-1937）、菊池素空（1879-1922）、谷口香嶠（1864-1915）、神坂雪佳（1866-1942）、牧野克治（1864-1942）、陶芸家には陶山の他に五代清水六兵衛（1875-1959）、七代錦光山宗兵衛、初代宮永東山（1868-1941）、河村蜻山（1890-1967）らがいた。陶磁器試験所長の藤江永孝（1865-1915）が制作に際して技術的に指導した。活動で作られた作品のうち特に優れたものは1912（明治45）年より東京の農商務省商品陳列場にて開催された展覧会に出品された。活動拠点の京都を離れて東京で展覧会を開催した目的は、製作者の力量を試し、世間にその名を広めることにあった。同展覧会に出品された陶山の作品は図版が伝わっており、陶山には珍しい幾何学模様の作品も見られる（図4）²⁹。陶山は遊陶園の活動外でも積極的に図案改革に取り組み、金屏風を思わせる《金地鶴図色絵角皿》のような作品も伝わっている。

特に京焼の発展において功績を残してきた陶山であるが、国内外の博覧会でも着実に結果を残していた。主要な受賞歴をあげてみると、1895（明治29）年の第4回内国勸業博覧会では妙技二等賞と有功二等賞を、1900（明治33）年のパリ万国博覧会には17点の作品を出品し銀牌を受賞している。1897（明治30）年開催の第2回ヴェネチア・ビエンナーレでは出品作が買い上げとなっている。

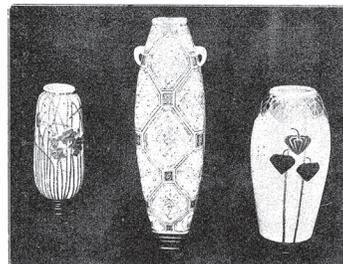


図4 第1回遊陶園展覧会への出品作
中央が陶山の作品

京都を代表する陶工として、多様な人々との交流もあったことが推測される。陶山の印に「陶翁」というものがあるが、これは久邇宮邦彦王（1873-1929）より1912（明治45）年に賜ったものである。陸軍大佐でもあった邦彦王は年に京都師団に総隊長として赴任。皇室とも関わりのあった陶山は、その際に全国の古陶磁について邦彦王に教授するなど交友があった。邦彦王は陶山の長年の功績と技術の高さを称えて号「陶翁」と金印銀印を賜った。「陶翁」の印は箱書にも2種確認できる。

3-5. 帝室技芸員任命とその後

帝室技芸員とは、美術工芸の奨励を目的に帝室が美術家を保護する制度で、後に芸術院会員や重要無形文化財保持者に繋がる仕組みである。終身制の榮譽職である帝室技芸員に任命されることは自らの技術を国家から認められることと同義であった。1890（明治23）年から任命が始まり、1944（昭和19）年の最後の任命までに79名が帝室技芸員に選ばれている³⁰。1915（大正4）年、陶芸家として初の帝室技芸員に任命された三代清風與平が没し、その翌年に陶芸の世界でもう一人の帝室技芸員であった初代宮川香山も他界した。その補充という意味があったのであろう、1917（大正6）年6月に陶山は初代諏訪蘇山と共に帝室技芸員に任命された³¹。こうして、名実ともに日本を代表する陶芸家に上り詰めたのである。

陶山は帝室技芸員に任命されてから3年後に病没したため、その期間は短いものであった。その間に彼が国のために貢献したことといえば、自身の作品、さらに長年収集した陶磁器コレクションを帝室博物館に寄贈したということであろう。

京焼が他産地の陶工よりも評価されていた理由の一つに、古陶磁の写しの技術の高さがある。有田や瀬戸のように同じものを大量に安く生産するのではなく、顧客のオーダーメイドに応えることを得意としていた。なぜそれができたかといえば、顧客でもある京都の寺院や歴史ある商家などが所蔵する古陶磁を閲覧する機会に恵まれていたということがあろう。しかし、陶山は他者のコレクションを見るだけでは満足できず、資金面に余裕が生まれた1879（明治12）年頃からは自ら古陶磁を収集するようになった。さらに、秘蔵するのは時代

錯誤と考えて、閲覧を望まれれば断ることはなかったという³²。

1919（大正8）年の皇太子御成年に際して、彼はそれらを帝室博物館に寄贈している。二代陶山（1932）はその点数を約80点としているが、前述の尾野氏の調査によって京都帝室博物館（現在の京都国立博物館）に37点、奈良帝室博物館（同、奈良国立博物館）に29点の全66点であったことが判明している³³。産地の内訳は京焼を中心とする日本製が9割以上を占めており、確実な海外製は2点のみ。しかしその2点も中国や東南アジアから輸入された茶陶《南蛮芋頭水指》と《建盞》であり、日本の伝統に立ち返る陶山の指向を窺い知ることができる。

これら古陶磁と共に陶山自身の作品もこの時に寄贈されている。《染付山水図四方花瓶》は、前述した緑綬褒章受章理由の中にも登場する「墨絵濃淡焼付法」が用いられた作品だと考えられている。名称の通り、山水や楼閣の質感を釉薬の濃淡で効果的に表現されている。帝室技芸員には自作を帝室博物館へ献納する義務があったため寄贈された可能性が高い。

陶山が生涯の最後に着手したのは、新たな窯の建造であった。三条白川畔の工場が手狭になったことから、東山を東に超えた山科鏡山（現在の京都市山科区）に新拠点を創設しようとしたのである。1918（大正7）年に着工し、2年後の1920（大正9）年7月に開窯した。しかし、初窯があいた3日後の同年9月24日に他界した³⁴。

おわりに

初代伊東陶山は陶芸の分野からは5人しか選ばれなかった帝室技芸員の一人であるが、その研究は全くと言っていいほど行われてこなかった。本研究により、その理由のひとつに、彼が日本工芸の中心であった京都で生まれ、京都で活躍した作家であることが関わっている可能性が見えてきた。更に、明治半ばから陶山が、粟田焼を含む京焼全体の発展を目的として、組合の統合や、試験場の創設、技術の公開、収集したコレクションの公開などを行っていたことが明らかとなった。作品の評価の高さだけではなく、そのような活動が緑綬褒章の受章や帝室技芸員任命につながったことが考えられる。

一方、本論では紙面の都合もあり、陶山の作品や博覧会の受賞歴などについて詳細を述べることができなかった。今後は作品の年代判定や、陶山独自の技術の解明などを進める。特に、遊陶園の活動と、京焼デザインに琳派風のデザインが浸透していく過程で陶山が果たした役割について解明することを今後の課題としたい。

註

1 『ナセル・D・ハリリ・コレクション ― 海を渡った日本の美術 ―』（1995年、同朋舎出版。全

- 5巻, 8冊) が出版され紹介されている。
- 2 「近代国際陶磁研究会発足の趣旨」(『近代陶磁：近代国際陶磁研究会通信』1号), 1999年。
 - 3 『没後100年：宮川香山』サントリー美術館・他, 2016年。
 - 4 岡本隆志氏の論考には「三代清風與平について(1)」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』11号) 2006年, 「三代清風與平について(2)」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』12号) 2007年, 岡本隆志「三代清風與平について(3)」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』14号) 2009年などが, 前崎信也氏の論考には「近代陶磁と特許制度 — 清風與平家から見た「写し」をめぐる京焼の十九世紀」(亀尾新, 彬子女王, 亀田和子編『写しの力：創造と継承のマトリクス』思文閣出版, 2014年) などがある。展覧会「大塩が生んだ京焼の名工三代清風与平」は姫路書写の里美術工芸館において2014年9月6日-10月5日に開催された。同タイトルの展覧会図録あり。
 - 5 「九谷の陶彫」展は石川県九谷焼美術館で開催された(2014年11月1日-2015年2月1日)。
 - 6 出光美術館で行われた波山の展覧会には「没後40年素描集完結記念：板谷波山展 — 神々しき匠の技 —」(2003年2月8日-4月13日)や, 「没後50年：板谷波山の夢みたもの — 〈至福〉の近代日本陶芸」展(2014年1月7日-3月23日)がある。
 - 7 関和男, 吉田和夫「歴代伊東陶山落款一覧表」『WCC アンティーク別冊小さな蕾』創樹社美術出版, 2000年, 26-28頁。
 - 8 森下愛子「近代京都の陶芸技術にみる古典へのまなざし — 革新と復古の間で京焼陶工が目指したのもの —」(東京文化財研究所『無形文化遺産研究報告書』3号) 2009年, 75-89頁。
 - 9 尾野善裕「初代伊東陶山と西洋陶磁 — エミール・ミュラー社製辰砂釉花瓶 —」(京都国立博物館『学叢』33号) 2011年, 115-120頁。
 - 10 小川金三編『粟田焼』粟田焼保存研究会, 1989年, 65-66, 140頁。
 - 11 「京都美術沿革史」は『京都美術協会雑誌』での不定期連載である。連載の最終号143号には「不石野郵成之」(野村成之)と, 著者の名が記載されている。
 - 12 北山明乃「初代伊東陶山が銀牌を受賞した日英博覧会賞状について」(京都女子大学生活造形学教室『生活造形』65号) 2020年, 55-58頁。
 - 13 両資料はいずれも近年古書店で購入されたものであり而中文庫の所蔵となっている。
 - 14 関如来(巖二郎)「初代伊東陶山小伝」(二代伊東陶山『初代陶山小伝』) 1932年, 頁数記載なし。
 - 15 中ノ堂一信『京都窯芸史』淡交社, 1984年, 90-92頁。
 - 16 黒田天外(讓)『名家歴訪録上篇』, 1899年, 281頁。
 - 17 この店の所在について, 「出品解説書」(『陶磁器業者二関スル取調書』編纂年不詳)には1885(明治18)年時点での住所が「京都市下京区四条通祇園石段下南入祇園町南側第八拾三番戸」と記載されており, これが店舗の住所であったと思われる。
 - 18 黒田前掲書, 282-283頁。
 - 19 同上。
 - 20 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』京都陶磁器会館, 1962年, 23頁。
 - 21 黒田前掲書, 332頁。
 - 22 前崎信也『大正時代の工芸教育：京都市立陶磁器試験場付属伝習所の記録』宮帯出版, 2014年, 13-14頁
 - 23 藤岡前掲書, 44頁。
 - 24 同上, 63頁。
 - 25 二代陶山編前掲書。

- 26 同上。
- 27 中ノ堂前掲書，118-119 頁。
- 28 遊陶園についての詳細は清世逸民「京都通信：遊陶園成績」（大日本窯業協会『大日本窯業協会雑誌』13 巻 146 号）1904 年，55-56 頁やクリストフ・マルケ「浅井忠と「図案」（講談社『日本美術全集 24：建築とデザイン』）1993 年，176-182 頁，中沢岩太博士喜寿祝賀記念会『中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖』1935 年，90-91 頁を参照。
- 29 陶山が遊陶園で制作した作品の図版は図 2 以外にも遠山貫月「京漆園遊陶園第二回展覧会」（建築工芸協会『建築工芸叢雑誌』18 号）1913 年，37 頁や「遊陶園京漆園陶漆器展覧会」（建築工芸協会『建築工芸叢雑誌』6 号）1912 年，38 頁に掲載されている。
- 30 樋口秀雄「帝室技芸員制度 — 帝室技芸員の設置とその選衡過程 —」（東京国立博物館『ミュージアム』202 号）1968 年，29-32 頁。
- 31 帝室技芸員選考の過程は『帝室技芸員関係書類』（東京国立博物館蔵）に残っているとされているが，残念ながら同資料中に陶山の選考に関する記録は残っていない。
- 32 黒田天外（謙）『名家歴訪録上篇』（1899 年）においても，取材のため自邸を訪れた黒田に対して永楽保全（1795-1854），欽古堂亀祐（1765-1837），仁阿弥道八（1783-1855）らの作品を見せている。
- 33 尾野前掲書，118-119 頁。
- 34 二代陶山編前掲書。

図版出典

- 図 1：『初代陶山小伝』二代伊東陶山，1932 年，頁数記載なし。
- 図 2：京都国立博物館蔵。
- 図 3：「伊東陶山君の飾壺」（京都美術協会『京都美術協会雑誌』67 号）1898 年，頁記載なし。
- 図 4：雪堂「芸苑雑記」（画報社『美術新報』11 巻 9 号）1912 年，293 頁。

Life and Works of Ito Tozan I (1846–1920):

Tozan's Contributions to the Kyoto Ceramic Industry and appointment to the Imperial Household Artist

KITAYAMA, Akino

Ito Tozan I (1846–1920) is one of five ceramic artists who were designated to the Imperial Household artist and is considered as one of the leading figures in the history of modern ceramics in Japan. Despite his importance in the history of Kyoto ceramic ware, the life and works of Tozan have not properly been studied. This research thus began gathering records and previous scholarly works on this ceramic artist. Then, it focuses on his decoration with the Medal with Green Ribbon and an appointment to the Imperial Household Artist. In 1880s onward, Tozan participated in projects to improve and promote the Kyoto ceramic industry such as integrating ceramic workers' unions and establishing ceramic research institute, which provided workers accesses to the latest technologies and products. Hence, his recognition by the government was a result of his contributions to improvement of the ceramic industry in Kyoto.